

言語文化への関心を高める中学校国語 (古典)の授業づくり

— 「読み比べ」による指導の工夫 —

中村 栄江¹

中学校国語科の指導において、言語活動の充実を図るとともに、効果的な古典指導の在り方も求められている。そこで、小学校での古典学習を踏まえた音読・暗唱中心の指導に加え、作品の内容理解に重点をおいた授業の工夫を考えた。昔話とその原典となった古典を、生徒の主体的な活動によって比較し、検討するという「読み比べ」の手法を取り入れたところ、古典を含む言語文化全体への関心の高まりが確認できた。

はじめに

平成20年1月、中央教育審議会が「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の答申を行った。答申では学習指導要領の改訂にあたり、六つの充実すべき重要事項の筆頭に「言語活動の充実」を掲げている。言語はコミュニケーションや感性、情緒の基盤であり、言語活動の充実は、各教科を貫く重要な改善の視点であるとしている。そのため、国語科で培われる言語の能力が各教科で行われる思考力、判断力、表現力等を育む学習活動の礎となり、他者や社会と関わる上での必要な力となることから、国語科の授業においては特に、言語の能力を伸ばす具体的な学習活動が必要とされている。

そして、「言語活動の充実」とともに教育内容に関する主な改善事項の一つに「伝統や文化に関する教育の充実」が挙げられたことを受け、平成20年告示の中学校学習指導要領（以下新中学校学習指導要領）において、内容の構成に〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設された。小学校、高等学校においても同様であるが、これにより伝統的な言語文化に触れ、「古典の世界」に親しむことの意義が明確にされた。また、中学校学習指導要領解説国語編（2008）

（以下新学習指導要領解説）では、小学校の学習を踏まえ、中学校ではより一層古典に親しませるとともに、我が国に長く伝わる言語文化について関心を広げたり深めたりすることを重視して指導するよう求めている。

そこで本研究では、これを中学校国語科の課題として受け止め、言語に関する能力を培うことと古典指導の充実を図ることの両面を効果的に指導するための授業づくりに取り組んだ。

研究の内容

1 研究の背景

中学校の古典指導は、一般的に音読・朗読・暗唱など音声言語の活動を重視して取り組まれてきた。平成19年度に行われた全国学力・学習状況調査〔中学校〕国語では、『枕草子』の冒頭の文を問う設問が出され、その正答率は88.0%と高かった。これは、古典の言葉のリズムが、声に出して味わう活動により生徒に浸透していることの表れであり、指導の成果の一つと捉えられる。しかし、教室での指導の経験を振り返ると、生徒は声に出す活動には楽しく取り組めていても、自ら「古典の世界」に親しみ、古典の作品内容に関心をもっているとは必ずしも思えない。

また、小学校学習指導要領（以下新小学校学習指導要領）の指導事項に基づき、来年度より小学校で古典の学習が導入されることとなった。そこで、先行実施の有無を考慮し、所属校生徒の小学校時における古典学習の実態を捉える必要があると考えた。授業前に、所属校1年生3クラス（94名）を対象に実施した事前アンケートによると、「古典を見たり聞いたりした経験がある」と答えた生徒が約半数であったが、「小学校で古典を学習した」と回答した生徒は13.8%と少なかった。一方、「小学校で古典を学習したかどうかわからない」という回答が半数あったことから、そもそも「古典とは何かわからない」生徒も多いということが把握できた。また、「古典はおもしろい」と答えている生徒が24.5%である一方で、「古典にある言葉の意味や内容を知りたい」と考えている生徒が69.1%と7割近くいた。このことから、音読や暗唱に加えて、古典の内容を理解させる指導が、古典への関心を一層高める有効な手立てではないかと考えた。

2 研究の構想

新中学校学習指導要領「指導計画の作成と内容の取扱い」には「古典に関する教材については、古典の原

1 小田原市立酒匂中学校

研究分野（言語活動の充実 国語）

4 「読み比べ」活動の実際

(1)導入の場面での「読み比べ」（読み比べA）

ア 教材選定の工夫とその有効性

教材として読み比べに使用する昔話の選定にあたり、まず事前アンケートで日本の昔話、神話、伝承への親しみの程度について尋ね、生徒にとってなじみのある作品を把握した。その中で、原典が明確かつ現代において絵本として一般的なものを選んだ結果、「うらしまたろう」（『御伽草子』の「浦島太郎」）、「いっすんぼうし」（『御伽草子』の「一寸法師」）、「したきりすずめ」（『宇治拾遺物語』の「雀報恩の事」）の3作品となった。それらの昔話の読み聞かせは、授業で読み聞かせられた経験が少ない生徒にとっては新鮮な体験となった。「桃太郎」や「金太郎」など昔話の多くが原典をもたず、口承という口伝の形で何百年も受け継がれてきたという説明に生徒は驚きを示した。『御伽草子』、『宇治拾遺物語』の原典については、対象生徒にとっての読み易さ、理解し易さを考慮し、指導者が現代語訳したものを冊子にして、生徒一人ひとりに配付した。冊子には原文を一部載せ、指導者が範読することで、音読によって得られる古典独特のリズムを味わわせた。この段階の活動により、昔話を後世に伝え残そうとした古人の思いや、長い歴史の中で大切にされてきた理由について考えさせ、古典に興味をもたせるきっかけとした。

イ 学習形態の工夫とその効果

生徒一人ひとりの取組みとして、班で担当する一作品について昔話と原典の現代語訳を読み比べ、登場人物や内容の違いについて読み取った事柄をワークシートにまとめさせた。「したきりすずめ」の登場人物、「うらしまたろう」の話の発端、「いっすんぼうし」の鬼退治の方法など大きな展開の違いには、ほとんどの生徒が気付くことができていた。しかし、一部の生徒はワークシートへの記述が困難であったため、読み比べる際の視点、段落に区切って読むことなど具体的な学習方法について机間指導による助言を行った。その後、より主体的な活動として班学習の形態をとり、記入事項について話し合わせ、個々のワークシートへ記入の追加、修正をさせた。その過程の中で教え合いや学び合いが行われ、自信がなくて記入できなかった事柄を確認したり、登場人物の人柄の違いなど正確な読み取りに基づいた記述が増えたりと、個の学習が補完できた。発表の時間では、古典から昔話へ至る内容の変容は、読み手（聞き手）である幼い子どもを意識したからだ、などの深い読解に基づく見解も見られ、それらの気付きをクラスで共有することで、古典のもつ魅力やおもしろさを感じ取らせることができた。また、第3次の教科書『竹取物語』への移行がスムーズになり、古典の原文に抵抗を感じることなく、音読に親しませることができた。これは、導入での読み比べ

により、古典への興味・関心が高まった結果と考える。

(2)まとめの場面での「読み比べ」（読み比べB）

教科書教材『竹取物語』と昔話「かぐやひめ」の読み比べ活動の目的は、導入段階で既習した学習方法をいかし、生徒一人ひとりが古典作品と向き合い、その内容理解を深めることにある。結果として、学習の方法が明確になり、個々の学習意欲を高めることができた。具体的にはワークシートへの記述量が増え、その記述内容も、読解に基づいた登場人物の人柄や心情に触れているものが多数見られた。読み継がれてきた歴史に思いを馳せ、古典が現代と切り離されたものではなく、身近でおもしろいものだと実感させることができた。この「おもしろさ」の実感こそが、今後の古典学習への積極的な関わりにつながるものと考えている。

〔読み比べ後の生徒の感想〕

- ・昔話より古典のほうがおもしろい。
- ・いろいろな古典を読みたい。
- ・古典に書かれているせりふや、言葉の使い方がおもしろい。
- ・昔話で明らかにされていないことを知るとおもしろい。
- ・古典は読みにくいけど、少しでも内容がつかめれば楽しめるということがわかった。
- ・現実的で残酷なところとか、古典を書いた人は、人間の悪いところとか性格をよくわかっている。
- ・千年以上の歴史があって、古典と昔話が違うことがおもしろい。

生徒の感想からは、内容の違いを読み比べながら、古典に描かれた古人の人間性まで読み取れたこともうかがえる。授業の成果の詳細は、次で述べることとする。

5 授業の成果

「読み比べ」を取り入れた授業展開が効果的な指導法であるかどうかを次の3点から検証した。

「読み比べ」の活動により

- (1) 古典への興味・関心が高まったか。
- (2) 古典への理解が深まったか。
- (3) 言語文化全般に関心をもてたか。

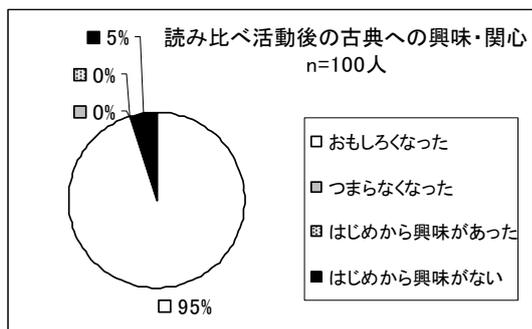
(1)「読み比べ」の活動により古典への興味・関心が高まったか

ア 事後アンケートの数値からの検証

授業後に行った事後アンケートの「読み比べの活動を通し、古典に対する思いが変わりましたか？」という問いでは「おもしろくなった」と答えた生徒が95%であった(第5図)。

また生徒の感想には、古典と昔話の内容や表現方法の違い、現代との言葉の違いにおもしろさを感じたという記述が多数見られ、読み比べの活動により、多くの生徒が古典へ興味・関心をもてたと実感しているこ

とが把握できた。以上のことから、読み比べの活動によって得られた気づきが、古典への興味・関心につながったことが分かる。

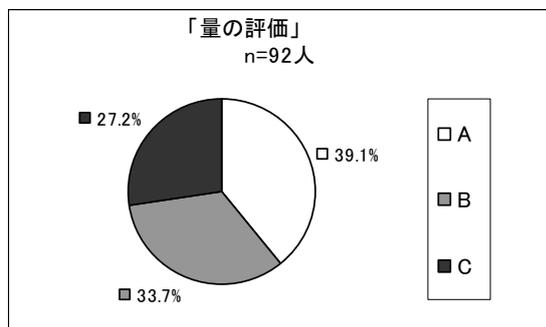


第5図 読み比べ活動後の古典への興味・関心
ワークシート・事後アンケートの記述からの検証

ワークシートの記述内容から「関心・意欲・態度」を見取る手立てについて、中村・堀内・岡本・尾崎(2006)は、個人内の変容として、①「量」の変化(文章量の増加)、②「質」の変化(気づきや思いの質的变化)、③「情意の変化」(具体的な興味や驚き、感動、これまでに得た知識と生活とを結び付けようとする試み、新たな疑問、持続的であろうとする決意、授業への期待)の視点で捉えられると述べている。導入とまとめの段階との読み比べの記述を比較した結果、②で述べる「質的な変化」が顕著であったため、上記の三つの視点において今回はあえて比較し、変化を見取ることにはせず、まとめの段階の記述について評価規準を定め、検証した。

①「量」の評価

『竹取物語』と昔話「かぐやひめ」の読み比べワークシートを資料とし、記述量について評価した。指導者の教材研究に基づいたB規準を、「五つ以上異なる点を見付けている」とした。そして「八つ以上異なる点を見付けている」をAの状況であるとして92人を対象に評価したところ、Aが39.1%、Bが33.7%、Cが27.2%となった(第6図)。



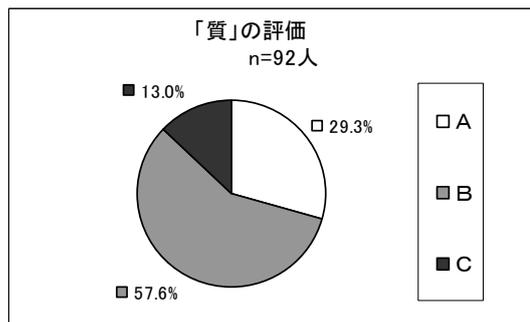
第6図 ワークシートによる「量」の評価

72.8%の生徒がB以上の評価となっているが、Cの生徒も27.2%と少なくない結果となった。これは、読み比べて気付いた違いを端的にまとめてワークシートに記述することに総合的な国語の能力が必要になることや、個人学習の形態をとったことにより導入での班

学習のように教え合いの場面无い状況での学習活動が要因と考えられる。ここから個の取組み場面での支援やその手立てについての課題が残った。

②「質」の評価

「量」の評価同様、『竹取物語』と昔話「かぐやひめ」を読み比べたワークシートを用いて、記入内容の「質」について評価した。B規準を「古典と昔話の展開の違いについて読み取ったことを、概ね分かりやすく記述している」とした。A規準を「古典と昔話の間で展開が異なる理由について触れている」として92人を対象に評価したところ、Aが29.3%、Bが57.6%、Cが13.0%となった(第7図)。



第7図 ワークシートによる「質」の評価

この結果より、AとBを合わせて約87%と比較的多くの生徒が、見付け出した展開の違いについて、読解に基づいてワークシートに記述できていることがうかがえる。このことから、導入での班学習の成果として、古典が時代を経て語り継がれ、読み継がれる過程で内容が変化していることに、多くの生徒が気付いたことが分かる。

③「情意」の評価

情意面での評価についてA規準に到達したと判断し得るキーワードとして「おもしろかった」「楽しかった」「驚いた」「感動した」という語が挙げられると言う(中村・堀内・岡本・尾崎 2006)。

事後アンケートに書かれた内容を分析してみたところ、これらの表現や、「～たい」「～はどうか」など今後の行動変化や古典への学習意欲につながる言葉も、多数見られた。

『楽しい』『おもしろい』

- ・読み比べの活動が楽しい。
- ・古典に書かれている内容がおもしろい。
- ・古人の思いや考えがおもしろい。

『もっと～たい』『～はどうか』

- ・いろいろな古典を読んでみたい。
- ・他の昔話の原典にあたる古典を読んでみたい。
- ・図書館で本を借りたい。
- ・古典の書かれた時代の習慣、日本の文化のを知りたい。
- ・他の昔話と原典は、どれくらい違うのだろうか。

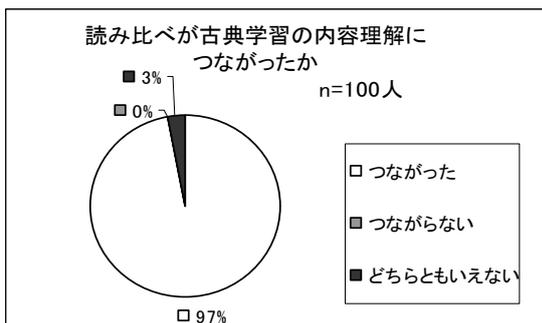
ウ その他(行動面への現れと支援のための環境整備)

関心・意欲の高まりは、事後の行動の様子に現れることも珍しくない。そこで、生徒の行動面での変容を観察により見取ることとした。古典への関心を高めるための指導者側からの働きかけとして、一つ目に、昔話の絵本と『竹取物語』の解説本を廊下に数冊展示したところ、休み時間に数人で集まってページをめくる姿が見られた。絵本は比較的短時間で読むことができ、絵に助けられて内容が理解しやすいという利点がある。個人差はあるが、事前アンケートでは、昔話のタイトルだけしか聞いたことがないという生徒もいたことから、現代に伝わる言語文化の一つとして昔話に触れさせることは意義があったと考えている。また、古典が家庭で話題に上り、幼い頃に読んだ昔話の本を学校に持参し、朝読書の時間に読む生徒もいたことから、より一層古典への興味・関心を高めるためには、家庭との連携も有効であろう。二つ目に、「他の古典を読みたい」という生徒の声に応える形で、校内の図書室にある古典の本のブックリストを作成し、生徒に紹介した。さらに、学校区にある公共図書館に協力を得て、古典の蔵書リストを作成してもらい、図書室内に掲示する形で紹介した。司書教諭や公共図書館と連携を図り、読書指導の一環として古典を扱うことも、古典への興味・関心を高める有効な手立てであろうと感じた。

(2)「読み比べ」の活動により古典への理解が深まったか

ア 事後アンケートの結果からの検証

事後アンケートにおける「読み比べが古典学習の内容理解につながったか」という問いに対しては、「つながった」と答えている生徒が97%、「つながらない」0%、「どちらともいえない」が3%であった。これにより、読み比べの活動が古典の内容理解に効果的であったと考えた生徒が多かったと言える(第8図)。

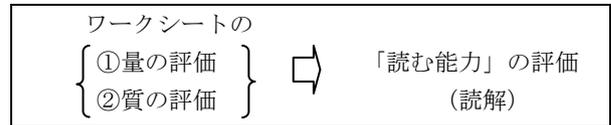


第8図 読み比べと古典学習の内容理解との関係

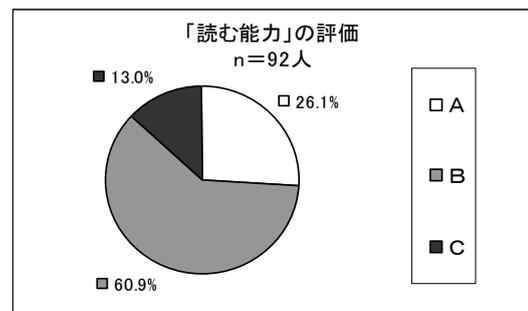
イ ワークシートの記述からの検証

古典の内容を理解すること、即ち文章の解釈は、新中学校学習指導要領「読むこと」の指導事項である。したがって、「読む能力」を評価することが指導の成果の見取りとなる。「読む能力」の評価資料には、「国語への関心・意欲・態度」の評価資料ともなった読み比べのワークシートを使用した。評価基準を新中学校

学習指導要領の1学年の指導事項に基づき、「古典の現代語訳を場面の展開や登場人物などの描写に注意して読み、内容をとらえている。」と「昔話と古典を読み比べ、内容の相違を読み取っている。」にした。前述の「量の評価」と、「質の評価」を合わせたものが「読む能力」の評価として適切であると考え、二つを総合的に判断した結果で生徒の読解の程度を見取ることとした。



ワークシートの「量」と「質」の評価を総合した「読む能力」の評価は、第9図のようになった。評価についてはそれぞれを点数化、加算したものを使用し、Aを規準到達度85%以上、Bを45%以上、Cを45%未満とした。結果を見ると、AとB、すなわち概ね満足とされる評価の生徒の割合は87.0%と高かった。これは、読み比べを通して、古典の内容がほぼ理解できたということになる。



第9図 ワークシートによる「読む能力」の評価

一方、ワークシートの「昔話と古典の読み比べをして気付いたこと」に関する記述では、古典のほうが残酷で現実的な内容であることを多くの生徒が述べていた。また、「なぜ昔話は、元となった古典と内容が変わっているのだろうか?」という問いへの記述では、昔話の多くが伝承という口伝の形で継承されていること、幼い子どもを聞き手の対象としたために、教訓を含んだわかりやすい内容に変えられた、という昔話の存在意義にも関わる記述が見られた。これらの、読み比べの活動で得られた驚きや新たな気付きは、生徒たちの古典への理解の深まりを示している。

『昔話と古典の読み比べをして気付いたこと』

- 古典のほうが昔話より物語が現実的だった。
- 昔話は読みやすく、人の気持ちをたくさん書き表しているが、古典は、「死」に関する表現がある。
- 古典は姫の策略がすごいし、翁の意地悪な感じとかグロテスクな場面とか、小さな子どもに見せてはいけないことが書いてある。
- 今でも昔話を読まれているということは、この話が、生きるために大切なことを描いているからではないか。

『なぜ昔話は、元となった古典と内容が変わっているのだろうか？』

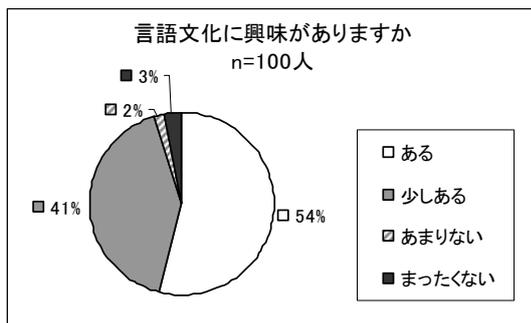
- ・読み継がれていった過程で、昔話が子ども向きに書き換えられた。
- ・読む人やその時代に適した話に変えられたと思う。
- ・人から人へ語り継がれるうちに、内容が変わった。
- ・現実的に書かれた古典を子ども向けに空想的に変えた。

今回の授業において、内容理解の深まりが前述の5(1)で検証した生徒の興味・関心と強く結び付いていることは、明らかである。

また、このことから「おもしろそう」「他の話はどうか」といった古典への興味・関心が「理解の深まり」を後押しするとともに、「気付いた」「分かった」という理解の実感が興味・関心の基盤となっていると言える。この興味・関心の高まりは、新中学校学習指導要領に示された、第2学年の古典の世界を楽しみ、第3学年の古典の世界に親しむという継続的な学習につながるものと考えられる。

(3)「読み比べ」の活動により言語文化全般に関心がもてたか

言語文化については、新学習指導要領解説に「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語」「古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能など」と定義されており、それらを生徒に説明した。昔の言葉で書かれた古典に親しむことで、能・狂言・歌舞伎など伝統芸能を含む言語文化への関心の広がりが期待できると考える。事後アンケートでは、「言語文化に興味がある」と答えた生徒が54%、「少しある」が41%で、合わせると95%の生徒が興味をもっていた(第10図)。



第10図 言語文化への興味・関心

これは、事前アンケートで「古典にある言葉の意味や内容を知りたい」と考えていた生徒が約7割だったことを踏まえると、相変わらず高い関心を示していると言える。しかし、興味が「少しある」と関心は高まったものの、指導者が設定した目標に到達していない生徒が41%いる。ゆえに、古典を含んだ言語文化という広いカテゴリーでの興味・関心を高める、より効果

的な指導の工夫について引き続き研究が必要と考える。

6 研究の成果と課題

本研究を通して、「読み比べ」の活動を取り入れた「読むこと」領域での内容理解に重点をおいた古典指導が、言語文化への興味・関心を高める効果的な指導法であることが明らかになった。また、人間の正しい生き方の指針として語られてきた経緯をもつ昔話は、道徳性育成の資料としても活用できると考える。

課題は、生徒が古典を「伝統的な言語文化」と強く意識できるような、中学校3年間の計画的な古典指導の在り方を構築することである。そして、学習の主體的な取り組みにつながるよう、生徒一人ひとりの言語に関する能力を高めるための具体的な支援と、そのための教材開発について検討することである。

おわりに

小学校低学年から「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が位置付けられ、系統的に古典に親しむ指導がなされることになった。ゆえに小学校での学習の実態を把握し、その内容を踏まえ、さらに高等学校での学習との連携を見通した古典指導の更なる工夫や効果的な指導計画の作成が求められる。伝統的な言語文化としての古典の価値に気付かせ、古人の築いた伝統や文化を享受し、継承・発展させる態度を育む古典教育の在り方について研究を継続したい。

引用文献

- 中央教育審議会 2008 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」 p. 53
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版 pp. 21-22
- 岩崎淳 2010 『岩崎淳国語教育論集Ⅱ 古典に親しむ』明治図書 p. 71, p. 77

参考文献

- 角川書店編 2010 『ビギナーズ・クラシックス日本の古典 竹取物語(全)』角川ソフィア文庫
- 国立教育政策研究所 2008 「平成19年度 全国学力・学習状況調査〔中学校〕 報告書」
- 大島建彦校注・訳 1974 『日本古典文学全集36 御伽草子』小学館
- 小林智昭校注・訳 1973 『日本古典文学全集28 宇治拾遺物語』小学館
- 中村祐治・堀内かおる・岡本由希子・尾崎誠 2006 『これならできる 授業が変わる 評価の実際 「関心・意欲・態度」を育てる授業』開隆堂